☆低学年での授業づくり＝学級づくり

小泉　靖

久しぶり（教師になって２度目）に１年生を担任した。前回担任した１年生で担任した子どもたちは、クラス編成の関係で持ち上がることはなかったが、今回は２年生まで持ち上がって担任することになった。

新年度が始まり、今年も教師の希望をもとにした担任配置が発表された。毎年のことではあるが、この時期いつも考えさせられるのが低学年の時期の学級づくり・授業づくりが学校という組織の中でやや軽視されているのではないかということである。自分自身の低学年を担任した少ない経験からではあるが、この時期の教師の子どもに対する日々の対応を大切に考えることが子どもたちのその後の成長に大きくかかわってくるという強い思いがある。しかし、現実には「低学年はやりやすい」という教師の側の勝手な思いこみが学校の中で定着しているのではないだろうか。

確かに、高学年に比べると学習内容が少ないということは間違いない。しかし、だからといって低学年を担当するということを安易に考えることは、非常に恐ろしいことのように思える。学習内容の比較的少ない余裕のあるこの時期にこそ、子どもたちに学校や勉強の楽しさ、友だちと一緒に取り組めることの喜び、さらには人間関係や人に対する見方の基本を身につけさせる必要がある。

低学年の子どもたちは、まだまだ教師や大人に対して批判的な目で判断を下していくという力をそれほど持ち合わせてはいないかも知れない。担任の先生（親に対しても）のことが無条件で好きだし、認められたいという気持ちを素直に表現する子が多い。その結果、教師の言葉や行動に対して、子どもたちは非常に敏感に反応する。わたしたちが日頃、無意識のうちに何気なく使っている言葉や普段の接し方から人に対する見方や考え方を指導してしまっているということを相当意識する必要がある。そして、このことはどの学年の子どもたちと接するときにも、とても重要なことではないかと思う。

わたしが担任した学級では、失敗や間違いに対する対応をどうするのかということを一番のポイントとして指導に当たったつもりである。かといって特別なことを考えたわけではなく失敗や間違いをしてしまうのは仕方がない。その後どうすることが大切かというごく当たり前のことでしかない。失敗や間違いに対してよりも、その後の行動に目を向けさせるようにしながら、安心して色々な活動に取り組める雰囲気をつ

くっていこうとした。
　そして、そんな安心感の中で取り組んだ実践について紹介していきたい。

☆学級を安心できる「居場所」にしていくために

　１年生の子どもたちの中には、小学校に入学するのが楽しみで仕方がないといった感じの子もいる。しかし一方で、数は少ないかも知れないが、新しい環境に対する不安が一杯の子もいるのではないだろうか。１年生の担任として、まず目を向けていかなければならないのは、まさにこの不安でどきどきしている子どもたちではないだろうか。
　以前、１年生を担任したときのこと。入学式が終わり、新しい教室に入って担任との出会いの場面。わたしは一人ずつの名前を呼んで、一人ずつ握手をして行くつもりだった。
　ところが、ある子どもの名前を呼んだところ返事がない。もちろん本人は、自分の名前の張ってある机を見つけてそこに座ってくれている。いなくなったわけではない。緊張のために声が出なかったのである。私はすかさずその子の席のそばに行き、もう一度その子の目を見ながら名前を呼んだ。今度は、小さな声ではあったがこちらの目を見ながら返事をしてくれた。

　わたしの中で、「返事くらいは出来て当たり前だろう」という気持ちがどこかにあって、教室の前に立ったまま横着に名前を呼んでいたことに気がついた。入学式という日が、子どもたちにとっては教師以上に緊張と不安で一杯の日であることを忘れていたのかも知れない。同時に、すぐにそばに行き、目を合わせて意識的に微笑みかけるということだけで、少し心を開くきっかけになるんだということもその子から教えてもらったうな気がする。

　その後しばらくの間、注意をしてその子の様子を見ていると、体を動かすのが好きだということがわかってきた。そこで、運動場に出てかけっこをしたりボールを使って遊ぶというようなことを他の子どもたちと一緒にするように心がけた。すると、しだいにその子の方からわたしを誘って外へ遊びに行くようになってきた。
「１年生のはじめの時は、いっしょのようち園の人しか知らないからすごくはずかし

くて、となりの人がしゃべってきてもぼくははずかしくてかたまってしまった。」
この子は、当時のことを２年生の最後の文集で当時のことをこのように振り返ってくれていた。

やはり入学して間もない頃、教室のオルガンに人気が集中したことがあった。何人もの子がオルガンのまわりに集まって、かわるがわるひいていたようだが、自分もひきたいのにそれをまわりの子に言い出せなくて困っている子がいた。しばらくの間、様子を見ているとわたしのところにやってきて、
「先生。みんながオルガンをひかせてくれない。」
と訴えにきた。その子自身がどのようして解決に向かって動けるだろうかということをもう少し見ていたかったのと、まだ子ども同士の世界にはいるのは早すぎるだろうと思ったので、
「お友だちに、ひかせてと頼んでみたら。」
とだけ言って様子を見ていると、結局何も言えないまま再びわたしのところにやってくる。その休み時間には、とうとうその子はオルガンをひくのを諦めてしまったようだった。
次の日、たまたまオルガンがあいてる時があったので、わたしがオルガンのスイッチを入れてひき始めた。ひくといっても右手の人差し指一歩でのたどたどしいものではあったが…するとたくさんの子が集まってきて、その後ろの方には昨日ひけなかった子が立っていた。そこで、その子の名前を呼んで「ひいてみる」というふうにたずねると、だまったままうれしそうにうなづいてオルガンをひき始めた。まわりで見ていた子の一人が横から入り込んできてひき始めたので、終わるまで待つようにいうと、しばらくして、
「わたし、もういいから〇〇ちゃんかわってあげる。」
と自分から言ってくれたので、「えらいね」という感じで頭をなぜてやった。
このオルガンの子もすごい恥ずかしがり屋だったようでかなり後になるまで図工などの作品を人に見せるのをいやがった子だった。でも、このオルガンの出来事以降、わたしにだけは色んなものを見せてくれたりするようになっていったように思う。
このように、自分のことを表現することが苦手な子たちこそ、学級開き当初の出来るだけ早い時期に、教室が安心できる場所であることを経験させてやらなければならないと思う。

☆ハプニングや失敗こそがチャンス

教室を安心できる場所として経験させていくためには、ハプニングが起きたときこそ大きなチャンスではないだろうか。５月になって給食が始まって間もない頃、牛乳を運んでいた子が手をすべらせて、何本かの牛乳びんが割れてしまったことがあった。本人は、大変なことをしてしまったと顔をこわばらせて、その場に固まってしまった。わたしは、すぐにそばに行って他の子どもたちにもよく聞こえるような声で、

「怪我してないか。痛いところはないか。」

と聞いてやった。幸いどこも怪我をしていなかったようで、涙を流しながら大きくうなずいていた。体が大丈夫だと言うことを確かめてから、自分で雑巾を取りに行き、割れたびんの片づけをしていると何人かの子が手伝いを始めてくれた。

「ありがとう。でも、牛乳びんが片づくまで近づいてはだめ。」

と制止しておいた。びんが片づいたあと、何人かの子がこぼれた牛乳をふいてくれていた。給食の用意が出来たあとに、３つのことを子どもたちに話しておいた。

①こぼれた牛乳をふこうとしてたくさん手伝ってくれたのがすごくうれしかった。
　こぼした子も、失敗してどきどきしていたのがすごく安心できたと思う。
②でも、ガラスなどが残っているときには、先生に任せること。
③失敗をしてしまった人が一番つらい立場にいて（どうしよう、困ったな、先生やみんなに何て言われるだろう）心がどきどきしていること。だから、面白半分ではやし立てられるのが一番悲しいと言うこと。

どれもごく当たり前のことなのかも知れない。しかし、その当たり前の姿勢を日常的に持ち続け、子どもたちと接していくことが安心できる教室を体験させることにつながると思う。失敗してしまった子、まわりで見ている子、応援しようとしていた子。どの子も自然な気持ちで動いていたと思う。でもその中で、どう行動することが、どう考えることが一番値うちがあるのか。ひとり一人が安心できる雰囲気づくりにつながるのか。そんなことを体験させるいい機会になったと思っている。

誤って牛乳を割ってしまったこの子は、２年生が終わる頃になってもこの出来事をしっかりと覚えてくれていて、よく似た失敗をしてしまったこの気持ちを鋭く察して

動いてくれるようになっている。そればかりか、ここで培った信頼関係が、水泳の授業の中で大きな力になっていった。

　水に対する抵抗が非常に強かったこの子は、１年生の水泳の授業の中では、最後まで顔を水につけることが出来なかった。それどころか初めの頃は、シャワーさえ一人では入ることが出来なくて、友だちに手をつないでもらいながら弱いシャワーを浴びるのがやっとだった。少しずつ様子を見ながら、顔に水をかける遊びを一緒にやるようにはなっていった。水泳の授業の間中泣きながら逃げまくる毎日だったが、最後までプールを嫌いになることだけはなかった。そして、「家のお風呂やシャワーで顔に水をかける練習をしてごらん。」というわたしのアドバイスを２年生の水泳の時期までずっと続けていたらしいのである。２年生になって、水泳の授業が始まる頃には、すっかり水に慣れていて、顔を水につけることもすっかり出来るようになっていた。後日、保護者から家のシャワーでの水かけ練習を毎日のように続けていたことを教えてもらい、折にふれ思い出したかのようにしかしていなかった励ましをしっかりと受け止めてくれていたことを本当にうれしく思った。当然２年生での水泳の目標にも到達し、本人もすごく喜んでいた。

　わたしは教室に子どもが使うような文房具をたくさん置いておくようにしている。鉛筆、消しゴム、下敷きや定規など、忘れ物をしたときにすぐに借りにこられるようにするためです。初めの頃、文房具を忘れてきたことを言いに来る子に対して、友だちに貸してもらうようにアドバイスするだけにしていたのだが、「貸して」ということを言い出せない子も中にはいました。しばらく様子を見ていると黙ったまま何もしていないこともあったので、
「どうしてお友だちに貸してって言えないの。」
と聞いてみても黙ったままということがありました。
「じゃあ、先生のを貸してあげるから前においで。」
と言ってみると、担任に対しては「貸して」という言葉も言いやすかったようで、それからはわたしのところに言いに来るようになりました。
　ところが、そんな様子をまわりで見ていたこの中から、
「色鉛筆忘れたの？じゃあ、わたしの使ってもいいよ。」
同じ班の中でこんな声かけをしている子を見つけました。プリントが早く終わったあ

との色塗りをしているときの出来事でした。わたしは、すかさず貸してもらった子のそばに行って大袈裟に喜びました。
「良かったねぇ。いい友だちがいて勉強が楽しくなるね。」
　２年生も終わりに近づいた時期になっても、わたしのところへ借りに来る子もいましたが、低学年、特に１年生の間は、持ち物や道具の点検を子どもだけの力でし切ることは難しいことだと思います。忘れ物のような失敗をしたときでも、その後どのように対処するかということの方がより大切だということをいつも念頭に置いて接していくように心がけたつもりです。

　ハプニングが起きたときと同じように、失敗したあとの行動を意識させることで行動する前から失敗をおそれるような気持ちを少しは払拭できたのではないだろうか。
　遠足での弁当の時間。わたしは一通り子どもが食べ始めるまで様子を見るようにしている。一人になりそうな子がいたときに、その子と一緒に食べるように誘いかけると、まわりに担任といっしょに食べたい子どもたちが集まってきて、結果的に一人っきりになる子がいなくなるのではないかと考えるからである。もっとも、今まで声かけが必要なことはほとんどなかったが。
　遠足を２週間後くらいにひかえたある日。わたしのクラスでは、担任の給食の用意を子どもたちがしていたのだが、たまたま、その日の担当の子どもたちが全員そろって用意を忘れていたことがあった。わたしは、これはいい機会だと何もいわずに自分の分を用意して、いつもは用意をしてくれる班と一緒に食べるところを一人で食べるようにした。何人かの子がわたしの様子に気がついて、
「先生。私たちの班で一緒に食べよ。」
と声をかけにきてくれた。そのころ一緒に遊ぶ友だちが少なそうで気になっていたＡ君も、声をかけにきてくれていた。
「ありがとう。でも今日は一人で食べるね。」
わたしは、声をかけにきてくれた子どもたちにこっそりとそう言って一人で食べていた。
　給食が終わる頃を見計らって、どうして一人で給食を食べていたかわかるかなということを子どもたちに投げかけてみた。何人かの子は「わからない」という顔をしていたが、用意をするのを忘れていたということを少し嫌みっぽく話したあと、
「でもね、一人で用意をしていたらＡ君とか他にも何人かの人が一緒に食べよって声

をかけてくれたのがとてもうれしかったよ。」
と、うれしかった方の話を強調していうと、Ａ君たち声をかけにきてくれた子どもたちは照れくさそうに笑っていた。
この何日かあとにも、給食でのトラブルがあり、自分の行動に対するバツとしてその日の給食を食べないという行動を自分で選んだ子に、
「一緒に食べられなかったら悲しい。」
と必死に声をかける子までが出てきた。
「一緒が楽しい」ということを経験した子どもたちは、実際の遠足の時には付き添いの先生や、バスガイドさんやバスの運転手のことにまで、
「一緒にご飯食べる人いる？」
と声をかけていたらしい。普段かっとなったときについ手が出てしまうＢ君のこの行動を、遠足終了後付き添いの先生から聞いたときとてもうれしかった。Ｂ君の何気ないやさしさが少しずつ全面に出始めていた時期でもあったので、翌日クラスのみんなに紹介し、楽しかった遠足を振り返ることが出来た。

☆「居場所」を実感させるためにこそ「評価活動」を

教室を安心できる「居場所」にしていくことは、もちろん授業の中で子どもたちの活動を保障していく上でとても重要なことだが、それ以上に、友だちを初めとした人に対する見方や接し方を自然のうちに優しいものにしていくことにつながるということを子どもたちから教わった。安心できる「居場所」というのは、失敗やハプニングに際しての教師や友だちの対応を通してしか子どもは実感していくことが出来ない。困ったとき、どうしていいかわからない人がいるときにどう行動することがお互いに気持ちよくつき合っていけるかということを経験を通して感じ合えたときに、教室は安心できる「居場所」として機能し始めるのだろう。
そして、「居場所」があることを経験させるための様々な教師の働きかけこそが「評価活動」ではないだろうか。以前のわたし自身の実践の中で、「ほめる」というテクニックを教師の都合にあわせて子どもたちを動かせるための手段として使っていた部分を認識できるようになって、「評価活動」に対する考え方が少しずつ変わってきたように思える。

☆授業の中でこそ安心感を

授業の中でこそ、子どもたちに失敗や間違いをおそれないでいいという実感を持たせてやらないことには、自立へ向かう学力を形成していく上で本当の力にはなっていかない。

とにかく図工の絵の時間になるとなかなか筆の進まなくなる子に対して、色づくりを中心の課題に置いた次のような展開を仕組んでみた。

◎「ビー玉のびんづめ」の実践

準備物　絵の具（使用するのは３原色のみ）
筆、筆洗、雑巾、フェルトペン、のり
画用紙（八つ切り）
◆直径３ｃｍ程度の円を縦に５列横に８列くらい印刷しておく。
色画用紙（四つ切り）
◆子どもたちに自由な色を選ばせる

作業手順　八つ切り１枚目

◇１列目赤、２列目青、３列目黄という具合に単色の絵の具に水の量の違いだけで８種類の色をつくらせ、それぞれの色を円の中にぬらせていく。
※必ず違う色になってから色を置くように指示する。
※ほぼ全員の子が１列目の赤が出来た時点で、２列目に青を使うことを知らせる。
※出来るだけはみ出さないようにと言う指示をするが、はみ出してしまってもあとではさみで切るので大丈夫だということを知らせておく。

◇４列目・５列目は赤と青の２色で色混ぜをして１６種類の違う色をつくって円の中に色を置いていかせる。

八つ切り２枚目（１枚目が出来上がった子に渡す）

◇１列目・２列目を使って青と黄の混色で１６種類の色をつくって円の中に色を置いていかせる。

◇３列目・４列目は黄と赤を使って同じように混色で色を置かせる。

◇５列目は、出来た色１種類ではなく２種類以上の混色で模様をつくってもいいことにする。

※２枚目もできた子には、３枚目を渡して自由に模様づくりに取り組ませる。

色画用紙（四つ切り）

◇出来るだけ色画用紙一杯に、ビー玉が入るようなびんをフェルトペンで自由に書かせる。

◇出来上がったビー玉をはさみで切らせてびんの中に自由にはっていかせる。

◇早く仕上がった子には、びんの空いているところに自由に絵を描かせる。

（クレパスでも可）

◎「虹の世界」の実践

準備物　絵の具（使用するのは３原色のみ）

筆、筆洗、雑巾、はさみ、のり、クレパス

画用紙（八つ切り）

◆表に２ｃｍ程度の間隔で実線を縦に１２本印刷しておく。

◆裏には２ｃｍ程度の間隔で実線を横に引けるだけひいておく。

色画用紙（四つ切り）

◆子どもたちに自由な色を選ばせる。

作業手順

◇画用紙を縦にして、一番右側の帯を赤１色でぬらせる。

※出来るだけ色むらがでないように気をつけさせる。

同時に色のはみ出しもないように注意させる。

◇赤のとなりには赤に少し青を混ぜて出来た色でぬらせる。

◇さらにそのとなりは、赤と青を同程度混ぜて出来た色、そしてその隣が青に赤を少し混ぜて出来た色、そのとなりには、青１色で同じようにぬらせる。

◇青のとなりには、青に少し黄を混ぜて出来た色、そしてそのとなりが青と黄を同程度混ぜて出来た色、そのとなりは黄に少し青を混ぜて出来た色、さらにそのとなりは黄１色で同じようにぬらせる。

◇さらに、そのとなりには、黄に少し赤を、黄と赤を同程度、赤に少しの黄をそれぞれ混ぜて出来た色でぬらせる。

◇１２本の帯すべてをぬり終えたら、画用紙を裏返しにして、横に引いた線にそって画用紙を切らせる。

◇出来た色の帯を自分の好きな色画用紙に自由に並べてのりで貼らせる。

※一度のりをつけていない状態で並べてみてから、気に入った並べ方を見つけさせる。気に入った並べ方が見つかってからのりを使うようにさせる。

◇色画用紙のあいた部分に自由にクレパスで絵を入れる。

◎「不思議な生き物」の実践

準備物　絵の具（使用するのは３原色のみ）
筆、筆洗、雑巾、はさみ、のり、クレパス
画用紙（八つ切り）
色画用紙（四つ切り）
◆子どもたちに自由な色を選ばせる。

作業手順

◇３原色から自由に２色を選ばせ、それを混ぜて出来た色を使って丸い形にぬらせる。

◇同様に３原色からの２色混色で、最初にぬった丸い形に添って三角形の形をつくり、その中に線で色を置いていかせる。

※約束事を３つ

１）線でぬるのは１回切り（２度ぬりやなぞるようなぬり方はしない）

２）出来るだけゆっくり（カタツムリのスピードでぬっていこう）

３）同じ速さでぬっていこう

※新たに使える技法として「ぼかし」を教える。

◇三角形にそって次の三角形をぬり足していきながら、自分が表現しようと思う「不思議な生き物」をつくっていく。

◇出来上がった「不思議な生き物」をはさみで切り抜いて色画用紙にのりで貼

らせる。

◇色画用紙の空いたスペースに今まで学習してきた技法を使って絵の具やクレパスで自由に描かせる。

※子どもたちに指導した技法としては、クレパスの型ぬり込み・型ぼかし、絵の具を使ってのふき絵など。

いずれの実践も、校内で共同研究を進めていた仲間から色々とヒントやアドバイスをいただきながら取り組んだものである。

最初の「ビー玉のびんづめ」では、単色の濃淡が水加減だけで様々に作り出せる楽しさを味あわせると同時に、２色の混色を使うことによって色の世界が大きく広がる楽しみを感じて欲しかった。また、形のあるものを見て描くことが苦手だった子どもたちに、色をつくったり色で遊んだりする楽しさを経験させることが一番の大きなねらいだった。

次の「虹の世界」では、単純な色の帯を気って少しずつずらしてはっていくと、自分たちが思っていた以上にきれいな作品が出来上がる。そんな体験を通して図工全般、特に筆で色を置くということに対する抵抗を取り除けたらと考えた。

そして、最後の「不思議な生き物」では、前の２つの作品で身につけた筆づかいや色遊びを楽しむ姿勢をもとにしながら、自分のイメージを大切に作品づくりに取り組む楽しさを味わって欲しかった。筆を使うことや絵を描くことに対する抵抗が強かった子どもたちも、この色の３部作では充分に楽しみながら作品づくりに取り組むことが出来たようだ。

「ビー玉のびんづめ」では、筆づかいがうまくいかなくてはみ出したらどうしようという不安が強い子がいたが「少しくらいはみ出してもはさみで切るから大丈夫だよ」というアドバイスで安心してビー玉づくりに取り組めたようだった。たくさんのビー玉をつくることが楽しくなって、時間が過ぎても残ってやり続ける姿が見られたのがとてもうれしかった。

「虹の世界」では、色の帯を完成させて自分の気に入った配列に仕上げるのが精一杯という子もいたが、余ったスペースを使ってクレパスで絵を書き足していくのを楽しんでくれたようだった。何人かの子どもたちにとっては、型ぬり込み・型ぼかしという技法がとても面白いものだったようだ。

また「不思議な生き物」では、三角形の中の線ぬりが気に入って色々なパターンの

ぬり方を考え出したり、ぼかしの技法が気に入った子はそれを使って三角形の中に模様をつくり出してくれた。そして、改めて指導し直した、型ぬり込み・型ぼかしの技法を使って、自分のイメージにあった世界をつくり、その生き物に名前を付けたり、その絵をもとにしたお話を色々聞かせてくれた。